論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　小林　真実

論　文　題　目

The Effects of Filled Pauses in English Oral Production on L2 Listeners' Linguistic Information Processing
(英語口頭表現における有声ポーズが聞き手の言語情報処理に及ぼす影響)

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	木下　徹
委員	名古屋大学教授	山下　淳子
委員	名古屋大学准教授	三輪　晃司

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

Ⅰ　本研究の概要

本論文は、英語のリスニングにおいて、有声ポーズ（Filled Pause,FP）が、聞き手の言語情報処理にどのような影響を及ぼすのかという問題について、これまで英語母語話者を対象にした先行研究で提唱されてきた、A.分割効果仮説（FP は区切を明確化するので、統語処理等が容易になる）、B.処理時間仮説（FP があると聞き手は処理時間が増え発話が処理しやすくなる）、C.注意方向定位仮説（FP は発話への聞き手の注意を促進し、発話処理が容易になる）、D.予測的処理仮説（FP が挿入されると聞き手は後続部がより複雑であると予測して処理する）という 4 つの仮説を中心に、大学生レベルの日本人英語学習者を対象にして検証したものである。

本研究は英文 200 ページ弱で、序章から結論と今後の課題まで、6 つの章と巻末付録等から構成されている。このうち、序章では、本論文の構成全体を紹介し、第 2 章では、リスニングにおける情報処理過程、及びその過程に対する有声ポーズの影響を、先述した 4 つの仮説を中心に、関係する先行研究を概括している。続く第 3 章では、本研究の主要な 2 つの実験のうち、道案内を聞いてモニター上の地図上の正しい場所を選択する地図タスク実験に関して、方法の説明、結果の混合効果モデルによる分析、及び刺激再生インタビュー法を用いた質的データを併用した考察を行い、分割効果仮説、処理時間仮説、注意方向定位仮説の検証結果を報告している。同様に、第 4 章では、刺激文と写真の一致を扱う写真タスク実験について、第 3 章と同様、実験方法、結果、分析、考察を論述し、注意方向定位仮説と予測的処理仮説を検証している。以上の結果を踏まえて、第 5 章では包括的考察として、注意方向定位仮説が部分的に支持され、それ以外の仮説は支持されなかったとしている。最後に第 6 章で全体の結論と今後の課題を論じている。

II. 評価

本論文は、少なくとも以下の様な点で評価できる。

（１）母語であるか否かを問わず、人間の自発的発話でほぼ必然的に発生し、流暢性判断にも影響を与えるとされる一方、これまで十分な注意が払われてこなかった、発話中でのポーズに着目している。

（２）先行研究を詳細に検討した上で、適切な仮説を選択し、それらが第 1 言語を対象としていて第 2 言語への適応可能性は未解明であることを明かにした上で、研究課題の設定、実験の遂行、結果の解釈と考察などを適切に処理している。

（３）結果の数量的データの処理には、当該分野では最も高度な多変量解析の 1 つとされる線形混合効果モデルを概ね適切に使用している。

（４）上記 3 点に依拠した研究の結果の知見として、第 1 言語に基づき提唱されている 4 つの仮説のうち、注意方向定位仮説が第 2 言語においても支持される可能性が高いことを示唆している。併せて、他の支持されなかった仮説に関しても適切な考察を

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

展開している。
（5）実験手続きの記述、刺激文、分析のＲスクリプトの巻末収録等を通じて、実験の再現性向上に努力している。

他方、本研究では、少なくとも、以下のような点で、今後の改善の余地があると思われる。
（１）単語の頻度は、言語的要因として、しばしば最も影響力のある予測変数とされるにもかかわらず､混合効果モデルの中で､明示的な共変量として処理されていない。これは、刺激文に使用された単語と文が、全体として、実験参加者にとって十分理解可能であったことは、参加者の熟達度と使用された語彙、構文等から推測でき、また事後インタビュー等からもその推測が支持されているとはいえ、モデル全体のデータへの適合度や変数相互の影響等を考慮すると､今後の改善点の１つであると思われる。
（２）混合効果モデルにおいて、要因としての実験参加者は、ランダム効果としてランダム切片のみが設定されているが、個人差に関わるランダム傾きは考慮されていない。実験参加者の影響は、熟達度をランダム効果として取り入れることで、ある程度、モデルに組み込まれているといえるが、近年、集団としての特徴とは別に、学習者の個人差にもより注目すべきであるという研究動向を考慮すると、参加者要因の取り扱いには、なお検討の余地があるといえる。
（３）今回の実験の後半では、練習の部分でも、刺激に関する写真による提示を行っているが､これは､一方では､課題の難易度を必要以上に引き下げる影響があり得る。他方、写真提示により、結果の解釈がより複雑になるという可能性も否定できない。
（４）実験時間や刺激文の統制上の制約等、やむをえなかったといえるが、全体として文の種類が少なく、また、実験参加者の熟達度からすると、やや易しすぎたきらいがある。そのため天井効果の懸念や、検証した仮説が効果を発現するのが必ずしも十分とは言えなかった可能性がある。また、実験参加者が日本人母語話者のみであったため、比較的省略が多い発話に慣れている等、日本語母語話者の特徴が結果に影響した可能性もある。これらの複合的影響から、結果の一般化はより制約を受ける可能性がある。

以上のような問題は指摘できるが、それらは、本研究が全体として有する意義を否定するものではない。また、本論文の筆者は、上記の点も含めて、本研究の限界と課題についても十分認識しており、今後の一層の改善と向上が期待できる。

結論として、本審査委員会は、本研究は博士の学位を授与するのに十分な水準に達していると判断した。